The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	『說文解字繫傳』「通論篇」考（二）
Author(s)	坂内, 千里
Citation	言語文化研究. 2023, 49, p. 51-69
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/90945
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『説文解字繫傳』「通論篇」考（二）

坂　内　千　里

On *Tong-lun pian* of the *Shuo-wen jie-zi xi-zhuan* II

SAKAUCHI Chisato

The *Shuo-wen jie-zi xi-zhuan*（i.e. Xiao-Xu-ben), written by Xu Kai in the Southern Tang era, consists of two portions. The first 30 volumes contain his annotation upon the *Shuo-wen jie-zi* which is the oldest existing dictionary, and are named *Tong-shi pian*. In the latter 10 volumes, Xu Kai's original argument is developed.

This paper examines the features of the description of *Tong-lun pian* which is included in the latter portion, by comparing it with the annotations of *Tong-shi pian*, and also considers the intention of dividing *Tong-lun pian* into three volumes.

キーワード：徐鍇，『説文解字繫傳』，「通論篇」

一　はじめに

南唐 徐鍇（921–975：以下，小徐と称する）の著した『説文解字繫傳』は，現存する最古の字書である『説文解字』の全体を通して注釈を施した最初の著作である。『説文解字繫傳』（以下，小徐本と称する）は，『説文解字』（以下，『説文』と称する）の許慎の解説である説解に対して注釈を施した「通釋篇」30巻に，「部敍篇」2巻などの論10巻を合わせた全40巻から成る。「通論篇」は，この論10巻に含まれる。

論10巻については，これまで余り言及されたことがなく，拙著以外で筆者が目にしたものは，次の2つのみである。まず，周祖謨氏は，小徐の説文学について考察した論文の中で，論10巻の性質について簡単にまとめた部分があり，その中で「通論篇」については，文字構成に含まれた意味を詳述したものであると述べている[1)]。2つ目は，古敬恒氏が小徐本について研究した

1）周祖謨『問學集』（北京 中華書局 1981年 第二次印刷版 総930頁）「徐鍇的說文學」843–844頁参照。原文は以下の通り。「通釋部分是解釋許氏原書的說解的，部敍是推陳說文五百四十部排列次序的意義的，通論是發揮文字結體的含義的，祛妄是駁斥前人說字的謬見的，類聚是擧出同類名物的字說明它們的取象的，錯綜是從人事推闡古人造字的意指的，疑義是論列說文所闕之字及字體與小篆不合的。至於系述，則猶如史記的自序、漢書的敍傳一樣，是說明各篇著述的旨趣的。」

著書の中で，簡単に言及したものである[2)]。そこで古氏は「通論篇」について，周氏と全く同じように説明した上で，天地・五行・君臣・礼義・称謂・品性・言語などの方面の全146字について，例を挙げながら伝統的な義訓・形訓・声訓の3種の方法で文字構成の含義を説くとする。更に，小徐は広く傍証を挙げながら，哲学的議論を展開し，古人が文字を作った深い意味を探求しようとしたが，ある程度の筋の通った論はあるものの，そのほかの多くが，時代の制約による間違いであったり，牽強付会の説が目立つとしている。

確かに，小徐は甲骨文・金文などの出土資料を目にしていないなど時代的制約が大きく，近代的文字学・音韻学から見ると，その説には間違いが多い。しかし，小徐の学術を考える上で，この論10巻を無視することはできず，そのうち3巻と最も多くを占める「通論篇」は大きな意味を持つと考える。それゆえ筆者はこれまでにも「通論篇」について考察を重ね，以下のような点を明らかにした。

まず，書物の引用については，「通論篇」に於ける引用を「通釋篇」と比較しながら分析し，1）書名を明記した引用が相当数ある，2）必ずしも忠実な引用ではなく，意を取りまとめた形の引用がかなりある，3）「禮」が『禮記』を指すと考えられるなど，「通釋篇」と共通する点もある一方，1）「通釋篇」では，書名を明記してかなり多くの種類の書物を引用しているが，「通論篇」で引用されているのはごく限られた種類のみで，そのうち経部の書物の占める割合が約85％と非常に高い，2）経部の書物の中でも，「通釋篇」で多く引用されていた『禮』・『春秋』・『爾雅』が「通論篇」ではほとんど引用されておらず，逆に少なかった『易』・『書』の引用数が多いというように，引用される書物の傾向がかなり異なっている，3）「通釋篇」にはほとんどない，書名を記さない引用が「通論篇」には相当数ある，4）「傳曰」とする引用が，「通論篇」に集中しており，その3分の2が『左傳』に基づくなどの相違点があることを指摘した[3)]。

そのほか，「通論篇」3巻について，1）各巻に取り上げられた文字の「通釋篇」に於ける分布の違い，2）「通釋篇」における「通論備矣」などの「通論篇」への言及の有無，3）各巻に取り上げられた文字の文字構成の違い―「通論上」は［会意］が最も多く，相対的に［形声］が占める割合が低くなっているのに対し，「通論中」では［形声］・［象形］・［会意］の三者の割合がほぼ等しくなり，「通論下」では［形声］が7割以上を占め「通釋篇」に近い割合となっている―などから，単に分量が多いことから機械的に3巻に分けられたのではなく，内容の違いから分けられている可能性が高いことを示した。また，文字構成の分析・記述では，「通釋篇」と比較して，「通論篇」では［象形］・［会意］・［象形＋会意］の割合が高く，［形声］・［亦声］の割合が相対的に低いなど，小徐の六書に対する考え方を，より鮮明に反映していることを指摘した[4)]。

2）古敬恒『徐鍇《說文繫傳》研究』（重慶大学出版社　1995年　総250頁）16–18頁参照。

3）拙著「『說文解字繫傳』「通論篇」引用書考」（『高田時雄教授退職記念　東方学研究論集』［日英文分冊］131–142頁　臨川書店　2014年6月）参照。

4）拙著「『說文解字繫傳』「通論篇」考（一）」（『言語文化研究』第47号　45–65頁　大阪大学大学院言語文化研究科　2021年3月）参照。

本論文では，以上の考察を踏まえ，「通釋篇」の注釈との比較などを通して，「通論篇」執筆の意図，及び3巻に分けられている意味などについて考察する。

なお，本論文では，最も善本と称せられる道光十九年（1839）寿陽祁氏（嶲藻）拠景宋鈔本重刊本の影印である中華書局本（1987年：以下，祁刻本と称する）を底本として使用する。但し，論10巻については問題が多いため，乾隆四十七年（1782）新安汪啓淑刊本（汪刻本と称する）をも参照する。また，「通釋篇」を引用する際には，特に必要がない限り，反切を省略する。引用に際しては，兄徐鉉等の校訂本（以下，大徐本と称する），及び段玉裁『說文解字注』（以下，段注と称する）を適宜参照する。大徐本は同治十二年（1873）陳昌治改刻一篆一行本（中華書局　1983年第7次印刷版），段注は経韻楼本（台湾芸文印書館　1979年第5版）を使用する。そのほか，『易』・『書』など十三経については，阮元十三経注疏本（台湾芸文印書館　1981年第8版）を使用し，『老子』・『莊子』・『列子』・『荀子』・『淮南子』は，『二十二子』（上海古籍出版社　縮印浙江書局彙刻本　1986年第1版）を使用する。

また，本文中の数字は，原則として序数は漢数字で，数値は算用数字で表記する。また，書名・篇名及び（訓読を含む）引用文には原則として旧字体を用いるが，使用フォントの制限により旧字体になっていないものもある。

二　「通釋篇」と「通論篇」

『四庫全書總目提要』（經部十　小學類二・字書之屬）は，小徐本について以下のように記述する。また，引用中，注目する部分には下線を付した。以下同じ。

> 說文繫傳四十卷、南唐徐鍇撰、鍇字楚金、廣陵人、官至右內史舍人、宋兵下江南、卒於圍城之中、事蹟具南唐書本傳、是書凡八篇、首通釋三十卷、以許愼說文解字十五篇、篇析爲二、凡鍇所發明及徵引經傳者、悉加臣鍇曰及臣鍇案字以別之、繼以部敍二卷、通論三卷、祛妄・類聚・錯綜・疑義・系述各一卷、祛妄斥李陽冰臆說、疑義擧說文偏旁所有而闕其字、及篆體筆畫相承小異者、部敍擬易序卦傳、以明說文五百四十部先後之次、類聚則擧字之相比爲義者、如一二三四之類、錯綜則旁推六書之旨、通諸人事、以盡其意、終以系述、則猶史記之自敍也（後略）

ここでは，「通釋篇」について，許慎の『說文』15篇をそれぞれ2つに分けて30巻としたこと，小徐が明らかにしたことや引用した経伝については，「臣鍇曰」・「臣鍇案」の語を付して区別していることを述べ，それ以外の篇についても，「祛妄は李陽冰の臆說を斥け、疑義は說文偏旁に有りて其の字を闕く所、及び篆體筆畫の相い承けて小異する者を擧げ、部敍は易序卦傳に擬え、以て說文五百四十部先後の次を明らかにし、類聚は則ち字の相い比べて義を爲す者を擧ぐ、一

二三四の類の如し、錯綜は則ち旁(あまね)く六書の旨を推し、諸を人事に通じ、以て其の意を盡くす、終うるに系述を以てするは、則ち猶お史記の自敍のごときなり」というように説明を加えるが，「通論篇」のみ言及がない。

それでは，次に『史記』「自敍」に擬えられた「系述篇」で，小徐自身はどのようにこの2篇について説明しているか見てみよう。

> 說文之學遠矣、時歷九代、年移七百、保氏弛敎、學人墮業、聖人不作、神旨幽沫、故臣附其本書、作通釋第一至三十
>
> 文字者、聖人之所以極深而研幾也、天地日月之經也、忠孝仁義之本也、朝廷上下之法也、禮樂法度之規也、人君能明之、立四極、包四海之道也、人臣能明之、事君理下之則也、字別有義、具之則繁、沿流索潤、以反其原、擧其要作通論三十三至三十五

『說文』の成書より七百年の年を経て「保氏は敎えを弛め、學ぶ人は業を墮(おこ)たり、聖人作(おこ)らず、神旨幽沫たり」として，その明らかでなくなった奥深い意図を解き明かすために「通釋篇」を作ったとする。それに対して「通論篇」は先ず文字について説き始める。文字とは「聖人の深を極めて幾を研(つまびら)かにする所以なり」と言う。これは『易』「繫辭上傳」の「夫易、聖人之所以極深而研幾也」に基づいたものである。従ってここは，文字とは聖人が，奥深いものを極め知り，微かなきざしを研究するためのものであるとなる[5]。更に続けて，文字は「天地日月の經なり、忠孝仁義の本なり、朝廷上下の法なり、禮樂法度の規なり、人君能く之を明らかにす、四極を立て、四海を包むの道なり、人臣能く之を明らかにす、君に事(つか)え下を理むるの則なり」と述べる。「通論篇」は，ここに挙げられた天地日月・忠孝仁義などに関わる文字を取り上げて，そこに含意される奥深く微かなきざしの意味することを明らかにしようとした（深を極めて幾を研かにする）ものだと考えられる。

「系述篇」の記述から，「通釋篇」は，長い年月を経て明らかではなくなった許慎の説解の意味を説き明かすために作られ，「通論篇」はそれとはまた別の方向から，文字の含意を解き明かすために作られたと考えられ，著述の目的は明確に区別されている。

そこで次に，「通釋篇」と「通論篇」では，その記述にどのような違いがあるか見ていこう。

まず，「通釋篇」に於ける小徐の注については，既に周氏の詳しい説明[6]があるので，以下にまとめておく。

1） 古義や名物（物の名や形状など）を解き明かす。

5）本論文に引用する『易』の和訳は全て，本田済『易 上』・『易 下』（中国古典選1・2）朝日新聞社　昭和53年）による。ここは『易 下』292頁。

6）注1）に挙げた論文845–851頁参照。

その方法には，古い書物を引用して古義を解き明かす，当時の言葉で古語を解き明かす，古い書物の語を用いて名物を説明するなどがある。

2）許慎の字訓に基づいて，古い書物の意味を解釈する。

3）古い書物の仮借を説明する。

4）古今字を説明する。

5）引伸義（派生義）を説明する。

6）別義（説解に挙げられている以外の意味）を併せ挙げる。

7）声符の誤りを指摘する。

例えば「昌」（巻十三 日部）の「從日從曰、曰亦聲」の注に「言亦聲、後人妄加之、非許愼本言也」と言うようなものである。

8）音により意味を説明する（「因聲以求義」）。

- 同じ声符を持つ語で説明する：

例えば「禎、祥也」（巻一 示部）の注に「禎者貞也、貞正也、人有善、天以符瑞正告之也」と言うようなものである。

- 字音が同じ，または近い語で説明する。：

例えば「芼、艸覆蔓」（巻二 艸部）の注に「芼、猶冒也」と言うようなものである。

これらは，A）字義（本義や，引伸義・別義）を説明するもの―1）・5）・6）・8），B）古い書物の用法を説明するもの―2）・3），C）古今字を説明するもの―4），D）文字の構成を説明するもの―7）に大別できる。なお，D）には単に象形・会意などと指摘するものをも含む。

次に，「通論篇」に取り上げられている文字122字について，その「通釋篇」に於ける注を簡単に見ておこう。ここで言う「『通論篇』に取り上げられている文字」とは，篆文で大書されており，且つ双行の小字でその文字についての説明があるものとする[7)]。

「通論篇」に取り上げられている文字122字中，「通釋篇」に於いて「通論備矣」や「通論詳矣」のような言及があるのは71条で，そのうち59条は「通論備矣」或いは「通論詳矣」とのみ注する。全く注のないものもあり，全122字のうち「通論備矣」・「通論詳矣」以外の注があるのは43条のみである。

欲　貪欲、從欠谷聲、臣鍇曰、欲人六情之所生也　【巻十六　欠部】

水　準也、北方之行、象衆水竝流、中有微陽之气也、凡水之屬皆從水、臣鍇按、周禮匠人建國水地以縣、言以水準地之平也、通論詳矣　【巻二一　水部】

父　矩也、家長率敎者、從又擧杖、臣鍇曰、指事、通論詳矣　【巻六　又部】

7）注4）に挙げた拙著46–47頁参照。また当該論文54頁で，「通論篇」に取り上げられている文字数を133字としているが，或体を別に数えるなど，本論文の数え方と少し異なる。

天　顚也、至高無上、從一大、臣鍇曰、通論備矣、會意　【巻一　一部】

人　天地之性最貴者也、此籀文人、象臂脛形也、凡人之屬皆從人、臣鍇曰、人配天地爲三才、萬物之最靈、字象人立形、通論備矣　【巻十五　人部】

「欲」では，説解の「貪欲」に対して，「欲は人の六情の生ずる所なり」とのみ注し，「通論篇」には全く触れない。これは「A）字義（本義や，引伸義・別義）を説明するもの」に相当する。「水」では，「準なり（水平，水平をはかる）」によって，『周禮』冬官「匠人」の「匠人建國、水地以縣（匠人國を建つるに、地に水するに縣を以てす）」を「水を以て地の平を準（はか）るを言うなり」と解釈する。これは「B）古い書物の用法を説明するもの」に当たる。「父」では，説解の「又の杖を擧ぐるに從う」について，「指事」であると注している。これは「D）文字の構成を説明するもの」に当たる。次の「天」も，説解の「一大に從う」について「会意」であると注している。やはり「D）文字の構成を説明するもの」に当たる。「人」では，説解の「天地の性最も貴き者なり」に対して，「人 天地に配して三才と爲す、萬物の最も靈なるもの」と注し、更に説解の「臂脛の形に象るなり」に対し、「字は人の立つ形に象る」と注する。これは「A）字義（本義や，引伸義・別義）を説明するもの」と「D）文字の構成を説明するもの」を組み合わせたものとなっている。

「通論備矣」・「通論詳矣」以外の注がある43条は，上記のように，字義を説明（A）したり，古書の用法を説明（B）したり，文字の構成を説明（D）するものであったり，それらを組み合わせたものとなっている[8)]。その中心は，字義を説明（A）するものと，文字の構成を説明（D）するもので，共に24条であった。なお，古書の用法を説明（B）するものは7条で，古今字を説明（C）するものはない。

皇　大也、從自、自始也、始皇者三皇、大君也、自讀若鼻、今俗以作始生子爲鼻子是[9)]、臣鍇曰、自從也、故爲始、說文皇字上直作自、小篆以篆文自省作白、故皇字上亦作白、書傳多有鼻子之言、<u>餘則通論備矣</u>　【巻一　王部】

ここで小徐は，構成要素[10)]「自」が「始なり」と訓じられる所以を説明した後，見出し文字の字体について説明を加える。『說文』は「**皇**」のように上の部分は「自」に作るが，小篆は，「自」

8）小徐の注には，周氏の説明以外のものも若干数ある。「卻給字從此」（巻五 谷部「谷」）のように，それが構成要素となっている文字を挙げるものや，次の「皇」のように，字体について述べるものなどがそれである。

9）この説解には誤りがあると考えられる。段氏は「<u>皇</u>　大也、從自<u>王</u>、自始也、始王者三皇、大君也（後略）」（一上 王部）に改め，「始めて天下に王たるは、是れ大いなる君なり、故に之に號して皇と曰う」と注する。なお，段注は見出し文字の字体を改めて，「皇」の上の部分を「自」ではなく「白」に作るが，改めた理由には言及がない。

10）漢字を構成する部分について，本論文では，「偏旁」ではなく「構成要素」と表現する。これは、日本語の「偏旁」が表す意味との微妙な差による混乱を避けるためである。詳しくは、拙著「『說文解字繫傳』「疑義篇」考（三）―「通釋篇」中の偏旁について―」（『言語文化研究』第43号）大阪大学大学院言語文化研究科　2017年3月）53頁参照。

の篆文が「白」と省されることから，「皇」に作るという。更に「今俗に作始(はじ)めて生るる子を以て鼻子と爲す」に対して説明を加えた後，「餘は則ち通論に備われり」という。

では，「餘」[11]とは何を指すのであろうか。「通論篇」の「皇」の条の記述を見てみよう。なお，「通論篇」3 巻は，それぞれ巻頭に「通論卷上」・「通論中卷」・「通論下卷」と題しており，「卷上」のみ題が他と異なる。本論文では，承氏「校勘記」巻下に従って，それぞれ「通論上」・「通論中」・「通論下」とする。また「通論篇」を引用する際，篆文で大書された文字は，太字のイタリック体で示す。以下同じ。

> 皇者大也、始也、天地既開、始爲君曰皇、故文王自爲皇、自始也、始爲王也、皇之爲言煌煌然、放道而趨、率姓而行、自然有合於道也、民無得而名、若觀火焉、不測其薪燎之本、但見其煌煌而已　***皇***　【巻三三　通論上】

このうち最初の「皇なる者は大なり、始なり、天地既に開き、始めて君と爲るを皇と曰う、故に文は王自を皇と爲す、自は始なり、始めて王と爲るなり」までは，説解の「**皇**　大也、從自、自始也、始皇者三皇、大君也」に基づいた記述であり，「通釋篇」と共通していると考えられる。従って，「皇の言爲るは煌煌然なり」以下が，その「餘」に当たる。この部分には，書名を記さないながら，典拠のある句が多くある。「道に放(なら)いて趨く」は，『莊子』雜篇「庚桑楚篇」の「外內轙者、道德不能持、而況放道而行者乎（外內に轙(かかず)らう者は、道德も持する能はず、而るを況んや道に放いて行く者(こと)をや）」に，「民無得而名（民 得て名づくる無し）」は『論語』「泰伯篇」の「三以天下讓、民無得而稱焉（三たび天下を以て讓るも、民 得て稱する無し）」に，「若觀火焉（火を觀るが若し）」は『書』「盤庚上」の「惟汝含德、不惕予一人、予若觀火（惟れ汝德を含める、予一人を惕(おそ)れず、予火を觀るが若し）」に基づくと考えられる。全体で，皇はさかんなさまである，その道に身をまかせて進んで行き，同姓を率いて進んでいけば，自然に道に合う所がある，世の評判にならないが，火を見るように明らかだ，かがり火の本を測らずとも，その盛んに燃えているさまを見るのみである，となる。これは「皇」という文字の字義そのものを説明したものではなく，その文字が表す概念に関わることがらを説明したものであると考えられる。

では，「通釋篇」の「皇」の注で，その「餘」といい，「系述篇」「字別有義、具之則繁、沿流索潤、以反其原、擧其要作通論三十三至三十五」で，「其の要」と表現したものが何であろうか。次に，「通論篇」3 巻に即して考えよう。

11）小徐注の中で「餘則」の 2 字が加えられているのは、もう一例ある。それは、「道　所行道也、從辵首、一達謂之道、臣鍇曰、所行道、此道字當作今導字之意、餘則通論詳矣」（巻四 辵部）であるが、この条はテキストの乱れがあり、意味が通らない。校勘記（上）も「此道字當作今導字之意」は、その古文の注であったはずだとする。説明のための例としてはふさわしくないため、ここでは「皇」の条のみを取り上げる。

三 「通論篇」3巻

第一章で述べたように，「通論篇」3巻は，単に分量が多いことから機械的に3巻に分けられたのではなく，内容の違いから分けられている可能性が高い。それでは，「通論篇」3巻は，それぞれどのような意図のもとに作られているのであろうか。それを考える上で，各巻の冒頭部分の記述が手懸りとなる。

> 昔在太初、泱鬱吁渝、若埴在範、若金在鑪、不**煆**不圯、實爲太始、水澤火熹、各與類期、上屬於天、下累於祇、聖人知之、物見其質、神示其情、聖人謀之、於是畫一以象道、一者妙萬物、而爲形者也、生二以象兩、二者佴也、佴次也、天實先成、地實次之、人生其閒、故二生三、三者參也、天成、地平、人參其閒、然後萬物形、而禮義昭矣、易曰、天一地二、老子曰、天大地大、故於文、一大爲天、天之爲言顚也、無所與高也、*天* 【巻三三　通論上】
>
> 在昔太始、萬物資起、飛揚積**墆**、各受其紀、或熾或冰、各以類凝、一不自固、故二生焉、二者一之任也、土者二之幹也、故於文一偶爲土、*土* 【巻三四　通論中】
>
> 昔在太素、清濁既敍、三光宣其精、五行播其形、參居鼎次、亦各有成、人者天地之化也、力與天地竝、故於文一偶二爲三、天地之和、人實敍之、弗躬弗親、庶民弗信、詞之繹矣、民之莫矣、人與天地同功、故亟成、故於文一一人口又爲亟、又手也、*亟* 【巻三五　通論下】

先に「通論篇」について考察した際にも触れた[12)]が，下線を付したように，3巻とも「昔 太初に在り」・「昔 太始に在り」・「昔 太素に在り」と類似したフレーズで始まり，また「一・二・三」及び「天・地・人」に関わる文字から説き始められていることから，明確な意図のもと3巻に分けていると考えられる。

この「太初」・「太始」・「太素」とは，何であろうか。『列子』「天瑞篇」に以下のようにいう。

> 子列子曰、昔者聖人因陰陽以統天地、夫有形者生於無形、則天地安從生、故曰、有太易、有太初、有太始、有太素、太易者、未見氣也、太初者、氣之始也、太始者、形之始也、太素者、質之始也、氣形質具而未相離、故曰、渾淪、渾淪者、言萬物相渾淪而未相離也、視之不見、聽之不聞、循之不得、故曰易也、易無形埒、易變而爲一、一變而爲七、七變而爲九、九變者究也、乃復變而爲一、一者、形變之始也、清輕者上爲天、濁重者下爲地、沖和氣者爲人、故天地含精、萬物化生

12）注4）に挙げた拙著48頁参照。

ここでは，それぞれ「太初なる者は、氣の始めなり」，「太始なる者は、形の始めなり」，「太素なる者は、質の始めなり」という。福永氏はその訳注の中で「この一章は，（中略）『易』の緯書『乾鑿度』の文章とほとんど同文である」[13]と指摘している。それは，『白虎通』「天地篇」が「故乾鑿度曰、太初者、氣之始也、太始者、形兆之始也、太素者、質之始也」と，ほぼ同じ文を『乾鑿度』の文として引用することからも示唆される。「通論篇」は「通釋篇」に比べて，書名を明記した引用に於ける『易』・『書』の割合が高く，更に書名を記さないながら『易』に基づいた表現も多い[14]ことから，『列子』ではなく易緯『乾鑿度』に基づくと考える方が適切であろう。

福永氏は，太初は気が初めて現象した状態，太始は形象が始めてそなわった状態，太素は物質を構成する元素であり，次の下線部の「一」は太初，「七」は太始，「九」は太素にそれぞれ当たると説明する[15]。従って，「一變じて七と爲り、七變じて九と爲る、九變なる者は究なり、乃ち復た變じて一と爲る」は，太初から太始，太始から太素へと変化し，そこで窮まって再び太初へと戻る循環を表すことになる。

ところで，『說文』は「一」から始まるが，そこでは次のようにいう。

一　惟初太極、道立於一、造分天地、化成萬物、凡一之屬皆從一、臣鍇曰、一者天地之未分、太極生兩儀、一旁薄始結之義、是謂無狀之狀、無物之象、必横者、象天地人之气、是皆横屬四極、老子曰、道生一、今云道立於一者、得一而後道形、無欲以觀其妙、故王弼曰、道始於無、無又不可以訓、是故造文者起於一也、苟天地未分、則無以寄言、必分之也、則天地在一之後、故以一爲冠首、本乎天者親上、故曰、凡一之屬皆從一、（後略）【巻一　一部】

ここでは「惟れ初め太極、道 一に於いて立つ、天地を造分し、萬物を化成す」とし，小徐の注も『易』「繫辭上傳」の「是故易有太極、是生兩儀（是の故に易に太極有り、是れ兩儀を生ず）」を踏まえて，「一なる者は天地の未だ分れず、太極 兩儀を生ず、一は始結を旁薄するの義、是れ狀無きの狀、物無きの象を謂う」としている。共に「太初」・「太始」・「太素」の何れでもなく「太極」とする。大徐本（一上 一部）は「惟初太始」に作り，小徐本と異なるが，段注（一上 一部）は異同に言及することなく「惟初大極」に作る。説解が「太極」・「太始」の何れに作っていたか，軽々には断じられないのでひとまず置くとして，小徐が「通論篇」において説解とは異なる「太初」・「太始」・「太素」を用いたのは何故か。それは，太初から太始，太始から太素，

13）『列子』1（福永光司訳注　東洋文庫533　1991年5月）21頁の注（1）参照。

14）注3）に挙げた拙著135頁参照。また，書名を記さない場合，見落としも多くなる―特に小徐の引用は必ずしも忠実な引用となっていないものも多いので見落としの可能性が高くなる―ため，明確な数字を挙げることは難しいが，「通論篇」では引用数が多い順に，『書』27(13)―最初が総数，括弧内が書名を記さないもの，以下同じ―，『易』16(10)，『禮』13(12)，『論語』11(11)，『莊子』9(7)，『淮南子』6(6）となっている。

15）注13）に挙げた書の23頁注（12）参照。また，次の注(13)に，「九變者究也」は『乾鑿度』が「九者氣變之究也」に作るのに従うべきという。

太素から再び太初へと戻る循環を示したかったからではないだろうか。許慎が『說文』を「一」に始まり「亥」に終わり，再び「一」にかえるという循環する世界としたのに倣い，小徐が「類聚篇」で「数類」の「一」から始まり「十二支類」の「亥」で終える配列とした[16]のと同じく，「通論篇」では，やはり3巻でその循環を示すために，巻を3つに分けて，それぞれの最初に「太初」・「太始」・「太素」の語を配したのではないだろうか。

このことは，「系述篇」の「通論篇」についての記述にも，循環を意識した記述があることからも，強く示唆される。小徐は最後に，「字別に義有り、之を具うれば則ち繁たり、流れに沿って潤を索め、以て其の原に反る、其の要を擧げ通論三十三至三十五を作る」という。ここで，「沿流索潤」はよくわからないが，「沿流（波）討源（流れに沿ってその源を求める）」と同じとすれば，その循環する文字の世界の要を挙げるために作ったということになり，やはり循環を意識した作りとなっていると言える。

では次に，それぞれの巻はどのような意図のもと，取り上げる文字を選んでいるのかを探っていくこととする。

まず，もう一度「通論上」の最初「天」の条を見てみよう。

「昔 太初に在り、泱鬱吁渝として、埴の範に在るが若く、金の鑪に在るが若く、煆りず圮らず、實ちて太始と爲る、水澤し火熹なり、各 類と期し、上は天に屬し、下は祇に累ぐ、聖人 之を知り、物 其の質を見し、神 其の情を示し、聖人 之を謀る、是に於いて一を畫し以て道に象る、一なる者は萬物に妙にして、而して形を爲す者也、二を生じ以て兩に象る、二なる者は佴也、佴は次也、天 實ちて先ず成り、地 實ちて之に次ぐ、人 其の間に生ず、故に二は三を生む、三なる者は參也、天 成り、地 平らぎ、人 其の間に參す、然る後に萬物形われ、而して禮義昭かなり矣、易に曰く、天 一ならば、地は二なりと、老子に曰く、天 大、地 大と、故に文に於いて、一大を天と爲す、天の言爲るは顚也、與り高き所無き也、天」という。

この「昔 太初に在り」から「實ちて太始と爲る」までは，『列子』「天瑞篇」（58頁の引用参照）にいう，気が初めて現れて，それが満ちて形象が備わるまでをいう。「各 類と期し」は，『易』「坤・彖傳」の「乃與類行（乃ち類と與に行く）」を，また「上は天に屬し、下は祇に累ぐ」は『列子』「天瑞篇」（同じく58頁の引用5-6行目参照）の「一なる者は、形變の始めなり、清輕なる者は上りて天と爲り、濁重なる者は下りて地と爲る、沖和の氣なる者は人と爲る」を踏まえていると考えられ，それぞれ同類に従って，（清く軽いものは）上って天に属し，（濁って重いものは）下って地に属すとなる。

その後の「一を畫し以て道に象る」は，「一」（巻一　一部）の説解「道は一に立つ」や，『老子』第四十二章の「道生一（道 一を生ず）」を踏まえており，その後の部分も，同じ第四十二章の「一生二、二生三、三生萬物、萬物負陰而抱陽、沖氣以爲和（一は二を生じ、二は三を生じ、三

16）拙著「『說文解字繫傳』「類聚篇」考」（『言語文化研究』46号　2020年3月　大阪大学大学院言語文化研究科）13-15頁参照。

は萬物を生ず、萬物 陰を負いて陽を抱く、沖氣 以て和を爲す)」を踏まえている。その後も書名を示さないが，典故のある表現が多く，「萬物に妙にして、而して形を爲す者也」は、『易』「說卦傳」の「神也者、妙萬物、而爲言者也」を踏まえたもので，「二は三を生む」は先ほどの『老子』第四十二章を，「天 成り、地 平らぐ」は『書』「大禹謨」を踏まえている。またその後の『易』は「繫辭上傳」，『老子』は第二十五章の文である。

この条は「天」の条であるが，文字「天」についての説明は，「天」の説解「顚也、至高無上、從一大」に基づいた「故に文に於いて、一大を天と爲す、天の言爲るは顚なり、與り高き所無きなり」のみである。それ以外の部分では，万物の生成を説き，「一，二，三」と関連付けながら，「天，地，人」の生成を説いている。

「天」の条には，上記のように，『易』（やその緯書）に基づくものや，陰陽に関わる表現が多く用いられている。陰と陽，天と地が互いに関係しながら成立しているように，「通論上」と「通論中」には，それぞれ「天・陽・上」に属すると考えるものと，「地・陰・下」に属すると考えるものが収められているのではないだろうか。「通論上」と「通論中」が関連付けられていることは，「和」の条の記述からも明らかである。「和」の条は「通論中」の最後に置かれており，以下の文で締めくくられている。

> 六德以和爲成、故周大司徒教民六德、曰智仁聖義忠和、和者德之成、故最在後、以包通之也　*和*　【巻三四　通論中】

この「六德」は，ここで言及されているように，『周禮』地官「大司徒」に「以鄉三物教萬民、而賓興之、一曰六德、知仁聖義忠和、二曰六行、孝友睦婣任恤、三曰六藝、禮樂射御書數（鄉の三物を以て萬民を教え、而して之を賓興す、一に曰く六德、知仁聖義忠和、二に曰く六行、孝友睦婣任恤、三に曰く六藝、禮樂射御書數)」とある。鄉学の三種の教法で万民を教化し，鄉大夫は賢能な者があれば，賓客の礼を以てこれを敬うとともに，王に推挙することをいう。この「六德・六行・六藝」については，鄭玄の注があり，「知は事に明らかなるなり、仁は人を愛し以て物に及ぼすなり、聖は通じて先ず識るなり、義は能く時宜を斷ずるなり、忠は言 中心を以てするなり、和は剛ならず柔ならざるなり、父母に善きを孝と爲し、兄弟に善きを友と爲す、睦は九族に親しむなり、姻は外親に親しむなり、任は友道を信にす、恤は貧者を振憂す、禮は五禮の義、樂は六樂の歌舞、射は五射の法、御は五御の節、書は六書の品、數は九數の計なり（知明於事、仁愛人以及物、聖通而先識、義能斷時宜、忠言以中心、和不剛不柔、善於父母爲孝、善於兄弟爲友、睦親於九族、姻親於外親、任信於友道、恤振憂貧者、禮五禮之義、樂六樂之歌舞、射五射之法、御五御之節、書六書之品、數九數之計)」とする。このうち「和は剛ならず柔ならざるなり」は，「通論中」の「和」の条の冒頭「不剛不柔曰龢」が基づく所だと考えられる。最後に「和なる者は德の成、故に最も後に在り、以て之を包通するなり」と述べ，「和」の条は「大司徒」の文で始まり，「大司徒」

の文で終わっている。

この「六德」は，「知・仁・義」が「通論上」に収められ，「聖・忠・和」は「通論中」に置かれている。その後の「六行、孝・友・睦・婣・任・恤」は「通論中」の「聖・忠・和」の直前に置かれており，これは地官である大司徒の職掌であることと関連しているのではないかと考えられる。では「知・仁・義」が何故「通論中」ではなく，「通論上」に置かれているのかが問題になる。これは「知・仁・義」が「五性」に含まれることに関わるのではないかと考えられる。

性　人之陽气、性善者也、從心生聲、臣鍇曰、五性仁義禮知信屬陽、所以五、五陽數、情屬陰、所以六、六陰數　【巻二十　心部】

情　人之陰气、有欲者、從心青聲、臣鍇按、白虎通人之六情、所以扶成五性、喜怒哀樂愛悪也　【巻二十　心部】

「性」の条の小徐の注に「五性 仁・義・禮・知・信は陽に屬す、五なる所以は、五は陽數なればなり、情は陰に屬す、六なる所以は、六は陰數なればなり」とあり，「五性 仁・義・禮・知・信」は陽に属するため，「陽・天・一」に関わる「通論上」に置かれていると考えられる。「知・仁・義」は「五性」として「通論上」におかれ，「六德」の残りは「陰・地・二」に関わる「通論中」に置かれているのではないだろうか。なお，この「性」は，次の「情」と共に「通論中」に収められ，「六情」の「喜・怒・哀・樂・愛・悪」は「通論下」に収められている。

ところで，議論を進める上では，どのような文字がどの巻に収められているのかについて一覧にした方がわかりやすい。そこで，「通論篇」に取り上げられた文字をまとめて［表 1］として最後に付した。「No.」欄は，巻ごとに通し番号をつけたもので，「1-01」は「通論上」の最初の文字を示す。同様に「2-01」は「通論中」の，「3-01」は「通論下」の最初の文字を示す。なお，「二」と「三」は，言及されてはいるが，篆文で大書されていないので，「00」としている。「行数」は 1 行 20 字から 22 字の割注の大まかな行数を示した[17]もので，正確な数字ではないが，概略を示すことはできるだろう。

「通論篇」に収められている文字は，様々な所での小徐の言葉から，一部は―例えば先に挙げた「六德」のように―その選択基準が示されるものもあるが，明確に述べられた箇所はない。しかし，「通論篇」3 巻のそれぞれの冒頭に「太初」・「太始」・「太素」という順序を表す言葉を用い，「通論上」の最初に「一・二・三」と関連付けながら「天・地・人」を説いていることから，この世界を構成する重要なもので「陽・天」と関連するものを「通論上」に，「陰・地」と

17）但し，五行の各文字のように前後いくつかの文字が関連し合って説明されていたり，「天」の条が全体の序のような役割を果たしており，その字自体の説明はそのうちわずかであるように、必ずしもここに示した行数が、その文字の説明に費やされた文字数を表すわけではない。

関連するものを「通論中」に配し，その間に生じた「人」の営みに深くに関わるものを「通論下」に配したと考えることができるのではではないだろうか。

また，「系述篇」で挙げられた「天地日月」・「忠孝仁義」・「朝廷上下」・「禮樂法度」がどのように3巻に配されているかを見ると，「天地日月」は全て「通論上」に配され，「忠孝仁義」は「忠孝」は「通論中」に，「仁義」は「通論上」に配され，「朝廷上下」を統治機構と取れば「通論上」の「王」から「官」までがそれに当たり，「禮樂法度」は「禮」は「通論上」に，「樂」は「六情」の一つと関連付けて「通論下」に，「法度」は「刑」と人間関係を表すものが「通論中」に配されている。このように，その大部分が「通論上」にあり，一部が「通論中」に配されている。このことは，まず「通論上」，もしくは「通論上」と「通論中」の構想が決まっていて，それ以外については，その後順次補われたことを表すのではないかと考えられる。また，「通釋篇」に注があるにもかかわらず，「通論備矣」など「通論篇」で論じていることに言及しないものが，「通論上」は9条中4条と半数以下であるのに対し，「通論中」は16条中11条，「通論下」は18条中16条と非常に多くなっていることも，その傍証となるであろう。

四　「餘則通論備矣」―「餘」について

それでは最後に，「皇」の条の注「餘則通論備矣」で「餘」とされたものが何であるか見ていこう。

最後の［表1］に示したように，「通論篇」の各条は，1行から42行まで長短様々なものがある。まず，各篇から短いものをいくつか挙げ，その記述の内容を確認しよう。

樂竟曰章、故於文音十爲章、十數之終也、詩頌十篇爲什也　*章*　【巻三三　通論上】
章　樂竟爲一章、從音十、十數之終也、臣鍇曰、通論詳矣　【巻五　音部】
聲之外曰響、響猶怳也、怳怳然浮也、訌訌然大也、實而精者曰聲、朴而浮曰響、響猶香也、虛之謂也、響之附聲、如影之箸形、故於文音鄉爲響、鄉猶向也、仿也、鄉亦響之聲也　*響*　【巻三三　通論上】
響　聲也、從音鄉聲、臣鍇曰、通論詳矣　【巻五　音部】

「樂」と「響」は共に「通論上」に属し，「通釋篇」で「通論詳矣」とのみ注している。しかし，「通論篇」では，「樂」は説解「樂 竟わるを一章と爲す、音十に從う、十は數の終わりなり」に完全に依拠して字義を説明し，「詩の頌 十篇を什と爲すなり」を付加したのみである。それに対して「響」では，説解には「響は聲なり」とのみあるものを，より詳しく「聲の外を響と曰う」・「實にして精なる者を聲と曰い、朴にして浮なる者を響と曰う」と説明し，「聲」と「響」の関係を「形」とその「影」に擬える。更に説解では声符とされていた「鄉」について，「鄉は

猶お向のごときなり、仿うなり」と意符でもあることを述べる。また「響」は「通論上」の最後の文字でもある。

名山含魄、五行具、山所以鎮地、出雲雨、以宣地气、故曰山宣也、故於文形隆而高疏宣爲山 ***山*** 【巻三四 通論中】

山 宣也、宣气散、生萬物、有石而高、象形、凡山之屬皆從山、臣鍇曰、山出雲雨、所以宣地气、山海經曰、積石之山、萬物無不有、張華博物志曰、山有水、有石、有金、木生火、故名山含魄、五行具也、象山峯竝起之形 【巻十八 山部】

心者人之本也、身之中也、與人俱生、故於文心象人心之正中也、其中畫右向歸於右也 ***心*** 【巻三四 通論中】

心 人心、土藏、在身之中、象形、博士說以爲火藏、凡心之屬皆從心、臣鍇曰、心星爲大火、然則心屬火也 【巻二十 心部】

「山」と「心」は共に「通論中」に属し、「通釋篇」には「通論篇」への言及はない。「山」は「名山 魄を含み、五行具わる」から始まり、五行の直後に配されている所以を述べる。その後は、説解の「宣也」と「象形」の説明となっている。「心」の条では、「通釋篇」では説解の「博士說は以て火の藏と爲す」に対しその所以を説いているが、「通論篇」では五行には言及せず，字義と字形のみを説いている。

悲者亦痛也、在內、故於文心非爲悲、非悲聲也、又心之所非則悲矣、淮南曰、得之則喜、失之則悲 ***悲*** 【巻三五 通論下】

悲 痛也、從心非聲 【巻二十 心部】

恩者因也、有所因也、故於文心因爲恩、因亦聲也 ***恩*** 【巻三五 通論下】

恩 惠也、從心因聲 【巻二十 心部】

篆文善從一言、一壹也、吉也、傳曰、一言而善也、否者不也、否（音痞）也、心有不可、口必言之、故於文口不爲否【否】【巻三五 通論下】

否 不也、從口不聲、臣鍇曰、不本音缶 【巻三 口部】

「悲」・「恩」・「否」はすべて「通論下」に属し，「通釋篇」には「通論篇」への言及はない。「悲」の条では，字義と「非」が声符であり，また意符でもあることを説く。「恩」の条では，説解に依らず声訓によって字義を説き，字形を説いている。「否」は「通論下」の最後に配されている。この前に置かれている「善」に対して，更に説明を加えた後，説解に従って字義を説き，「不」が声符であると同時に，意符でもあることを述べる。

このように，短いものは，必ずしも全てが説解に依拠しているわけではないが，字義を説き，字形の成り立ちを説くものが多い。字形を説く際に，説解が声符としているものに対して，字

義にも関係することを説く傾向にあるという違いはあるが，わざわざ別に巻を立てる必要があるほどの違いは見いだせない。

しかし，「通論篇」各篇はこの世界を構成する重要なものと小徐が考えた文字を取り上げ論じたもので，そのうち「通論上」は「天・陽・上」に関連するもの，「通論中」は「地・陰・下」に属すると考えるもの，「通論下」は天地の間に生じた人の営みに深く関わるものを取り上げている。それらは単独ではなく五行・六情などまとまった概念を表すうちの1つとして取り上げられたものも多くあり，前後の条と併せて見る必要がある。それ故，単純にその文字の条だけを見て論じることはできない。

そこで次に，より特徴がはっきり表われると考えられる長い記述のあるものを見てみよう。長いものには，短いものにはない，どのようなことを説いているのであろうか。最も長いものは「和」の条であり，その長さは突出している。これは，「通論中」の最後に配されているのであるが，先に見た「通論上」の最後に配された「響」，及び「通論下」の最後に配された「否」が，むしろ短く簡潔に述べられているのとは，対照的である。「和」の条は，少し長すぎるので，抜粋しながら見ておこう。

「和」の条は，「不剛不柔曰龢、言若宮商之龢聲、五味之龢羹以相濟也（剛ならず柔ならざるを龢と曰う、宮商の龢聲、五味の龢羹の以て相い濟（な）るが若きを言うなり）」から始まる。最初の「不剛不柔曰龢」は，先に見たように，『周禮』地官「大司徒」の注に基づく。この後，「和」の構成要素である「禾」に話が及ぶ。「禾者五穀之龢气也（禾なる者は五穀の龢气なり）」と述べた後，「禾」の説解「二月　始めて生れ、八月にして熟し、時の中和を得るなり（二月始生、八月而熟、得時之中和）」（巻十三 禾部）を引用する。その後も「十一月 一陽生じ、正月 二陽生じ、三月 三陽生ず、未だ五月にならずして極まり、陰陽中分す（十一月一陽生、正月二陽生、三月三陽生、未五月而極、陰陽中分）」と，陰陽の消長と万物の生長・成熟，君臣関係などを関連付けながらの記述が続き，「故傳曰、陰不孤立、陽不獨存、故曰、禾二月生、八月熟、得時之中和（故に傳に曰く、陰は孤立せず、陽は獨存せずと、故に曰く、禾は二月に生れ、八月に熟し、時の中和を得と）」と述べ，ここまでの議論を締めくくる。「傳」は『西京雜記』（巻五）に同様の記述が見え，その後は，この段落の最初に引用した「禾」の説解で締めくくっている。

更に説解の「中和」を受け，「中和にして生じ、中和にして成る（中和而生、中和而成）」と続け，『易』・『書』・『詩』・『淮南子』・『呂氏春秋』・『山海經』など多くの書物に基づきながら，鳥の鳴く声の和・人心の和・鳥獣の和・金石の和を説いた後，「太平の世、人 和气を含み以て和穀を食す、故に文に於いて口禾を和と爲す（太平之世、人含和气以食和穀、故於文口禾爲和）」と「和」の字形について説明する。更に「和なる者は名づく可からざるなり（和者不可名也）」として，剛柔・五音・五味を例としてあげる。それらを聞いて，或いは食して最も宜しきものを

「和」というとして，五色の中色を黄色とする所以を述べる。最後に『列子』「仲尼篇」の文[18]を引用してこの段落を終える。この引用をはじめ「和」の条に引用されるものは，その多くが書名を示していない。引用は，堯の治世50年のことである。「不知天下之治歟、不治歟、百姓之願戴己歟、不願戴己歟、問於在朝、在朝不知、問於在野、在野不知、乃微服而之康衢、聞遊童子之歌於疆畔者、曰、立我烝民、莫匪爾極、不識不知、順帝之則、問誰爲此歌者、曰、聞於長老、問諸長老、曰、古詩也」という。長いので要約すると、堯は世の中がうまく治まっているのか，民が自分を天子とすることを願っているのか分からず，朝廷の役人や民間の人たちに尋ねても分からなかったので，お忍びで街に出たところ，子供たちの歌うのを聴いた。「我が烝民を立つるに、爾(そ)の極（中正至善の道）に匪ざるは莫し、識らず知らず、帝（天帝）の則(のり)に順う」というものであった。堯は，誰がこの歌を作ったのか尋ねたところ，長老から聞いたと言う，そこで長老に尋ねると，古代の歌謡であることが分かった，というものである。この詩は前半2句が『詩』周頌「思文」の引用であり、後半2句が『詩』大雅「皇矣」の引用であり、それぞれ后稷・文王の善政を歌ったものである。これに対し小徐は「此れ和の極なり」とする。

この後，「和」について「和之言唱和（音去聲）也」・「和之言同和（音禾）也」と説明し，『易』「乾・彖傳」の「保合大和、乃利貞（この自然の大調和を持続せしめ、これに和すること、これこそが利貞である）」を引用して，「其の本を理めずして、天下の和を欲す、伏羲 爲す能わざるなり（不理其本、而欲天下之和、伏羲不能爲也）」といい，先に引用した「六德」の説明で「和」の条を終える。

この「和」の条は，「通論中」の最後に置かれており，陰陽の消長・五行と関連付けながら「和」の持つ意味を説いており，「和　相應也、從口禾聲」（巻三 口部）に対応した説明は全くない。

「通論上」・「通論中」では特に陰陽・五行と関連する記述が多く出てくる。また，書名を示すか否かにかかわらず，この2巻における道家の書を引用する割合が，「通釋篇」などと比べて高い。このことは，この陰陽の形成に道家が大きく関与していたこと[19]と関係があるのかもしれない。この条は，「和」について深く考察しようとしたというより，「通論上」と「通論中」で述べてきたことのまとめとしての役割を持つのではないだろうか。

「和」の条は，他と少し性質が異なると考えられるため，次に，字義・字形の成り立ちを説く以外の記述を含む「禮」の条を見てみよう。

清光皆明也、水火皆在地也、故曰、在地者、莫明乎水火、在人者、莫明乎禮義、故於

18）『列子』「仲尼篇」の原文は以下の通り。小徐の引用と異なる部分に下線を引いた。「堯治天下五十年、不知天下治歟、不治歟、不知億兆之願戴己歟、不願戴己歟、顧問左右、左右不知、問外朝、外朝不知、問在野、在野不知、堯乃微服、游於康衢、聞兒童謠曰、立我蒸民、莫匪爾極、不識不知、順帝之則、堯喜問曰、誰教爾爲此言、童兒曰、我聞之大夫、問大夫、大夫曰、古詩也」

19）陰陽・五行については，林克「陰陽・五行」（『中国思想文化事典』（東京大学出版会）2001年　469–478頁）を適宜参照した。

文示**豐**爲禮、示者明示之也、示日月星也、又古祇字也、**豐**者禮器也、禮之祕也、難覩、故陳籩豆設簠簋、爲之揖讓、升降趍翔、以示之、禮者履也、道明示人、則履行之、禮者示也、故古兩君相見、陳禮樂以相示也、明則易見也　*禮*　【巻三三　通論上】

ここでは，まずこの字の前に取り上げられている「清・光・明」を用いて，「清と光は皆な明なり」と説き始める。水と火はどちらも地に在るので，「地に在る者は、水火より明らかなるはなく、人に在る者は、禮義より明らかなるはなし」というとする。これは『荀子』「天論篇」「在天者、莫明於日月、在地者、莫明於水火、在物者、莫明於珠玉、在人者、莫明於禮義」からの引用である。

続けて「故に文字に於いては，示豊を礼（禮）とする。示は明示するということである。示（の三垂するもの）は，日月星である。また古の祇の字である。豊は礼器である」という。この部分は，後の「禮者履也」と共に，説解「示　天垂象見吉凶、所以示人也、從二、三垂日月星也」、「禮　履也、所以事神致福也、從示從**豊**、**豊**亦聲」（共に 巻一 示部）、「**豊**　行禮之器也、從豆、象形」（巻九 豊部）に依る。

「礼の祕は，覩（み）ることが難しい。故に籩豆を陳ね設けて，簠簋を設け，揖讓の礼をし，昇降に趨翔して，その礼を示す」。この部分は，『禮記』「曾子問」の「大夫之祭、鼎俎既陳、籩豆既設、不得成禮廢者幾」及び「天子嘗禘郊社五祀之祭、簠簋既陳」などを踏まえている。

「礼は履むことである。道を人に明示すれば，人はこれを履行する。礼とは示すことである。故に古（いにしえ）は両君が相い見るとき，礼楽を陳し，互いに示すのである。明らかならば見やすい」。ここも『禮記』「仲尼燕居」の「兩君相見、揖讓而入門、入門而縣興、揖讓而升堂、升堂而樂闋、下管象武、夏籥序興、陳其薦俎、序其禮樂、備其百官、如此而后、君子知仁焉（兩君相い見るとき、揖讓して門を入り、門を入りて縣興こる、揖讓して堂に升る、堂に升りて樂闋（や）む、象武を下管し、夏籥序興し、其の薦俎を陳し、其の禮樂を序し、其の百官を備う、此の如くして后に、君子仁を知る）」を踏まえたものである。

「禮」の条では、まず「明・清・光」に続き「禮」を取り上げた所以から説き始め，主に説解に依りながら字義を説明する。更に「禮」が「示」と「**豊**」から成ることに込められた意味を，古書の例に基づきながら説き進めている。主にこの最後の部分が，「餘則通論備矣」の「餘」に当たる。

古氏[20]は，「通論篇」について述べた部分で，「禮」を例として取り上げている。そこでは，「示**豊**爲禮」・「又古祇字也」・「**豊**者禮器也」・「禮者履也」については，ある程度道理はあるとする。これは説解に基づいて字義を説いた部分である。しかし，ここについても，「禮」はもともと「醴」の初文である「**豊**」だけから成り，「示」は後から加えられたもので，また「示」も位

20）注 2）に挙げた書の 17–18 頁参照。

牌の形であり日月星とは関係がないと，その誤りを指摘する。更に，そのほかの部分については牽強付会が目立つ（至于文中其余的**阐释**部分，就**显**得**牵**强附会了。）とする。また，漢字の構造の意味を分析した部分にはでたらめなものがあるとして，「好」の条を挙げる。

好者好也（好上聲）、愛而不釋也、女子之性柔而滯、有所好、則愛而不釋也、小子之性亦然、好附著者也、故於文女子爲好、孔子曰、有顏回者、好學、傳曰、生好物也、未有輕而捨其生者　***好***　【巻三五　通論下】

好　美也、從女子、臣鍇曰、子者男子之美稱也、會意　【巻二四　女部】

ここでは，女性は気に入ったものがあれば手放さず，子どもも同じであるから，「女」・「子」を「好」とするとしている。更に，『論語』「雍也篇」の「顏回なる者有り、學を好む」，および『左傳』昭公二五年の伝の「生は好き物なり」を引き，「未だ輕んじて其の生を捨つる者有らず」と締めくくる。古氏は最初の字の構成を説いた部分については，封建的な精神論に満ちており，全く字形の説明と関係がないとし，更に「通釋篇」で「子なる者は男子の美稱なり」と注することを挙げ，こちらがまだ学術的な議論となっているのに比べ，大いに後退しているとする。

「禮」の条で見たように，文字に込められた意味を，古書の例に基づきながら説き進めている部分が，「餘則通論備矣」の「餘」に当たり，「通論篇」の主要部分である。この部分は，当時の学問・思想に基づき，字形に基づいた字義解釈から更に踏み込んで，その文字の持つ概念・思想的意味合いを解き明かそうとしたものであり，そのため，古氏の指摘のように儒学的・封建的色彩の強い記述となっている。また，豊富な出土資料を見ることのできる現代から見れば，時代的制約ゆえの誤りを多く含むことは確かである。しかし，古氏のように，性質の異なる「通釋篇」と「通論篇」とを一律に扱い，字義解釈として大いに後退していると批判することに，意味があるのだろうか。

「通釋篇」は許慎の説解に基づき字義を解き明かすための注釈であるのに対し，「通論篇」は字義にとどまらず，その文字の表す概念・思想的意味合いを説こうとしたもので，その時代の考え方を色濃く反映している。それが古氏が批判する原因にもなっている。ただ，小徐は望文生義に陥らないように，多くの書物に基づきながら，文字の表す世界を解き明かそうとしている。更に「部敍篇」が許慎の表す「一に始まり亥に終わり，再び一に戻る」循環の意味を説いているのに対し，「通論篇」は取り挙げる文字及びその配列なども含め3巻全体で，やはり別の形での循環を構成する工夫をしている。「通論篇」は，「部敍篇」と共に論10巻の中心を成すものであるが，字形に基づき字義を解き明かす『說文』に於いては，やはり異質なものとなっており，時代の制約をより強く受けるものとなっている。その異質さゆえに，『四庫全書總目提要』では「通論篇」のみ触れられることなく，古氏の酷評を受けることとなっている。しかし，

小徐自身も，その異質さを理解していたからこそ，「通釋篇」の中ではなく，別に論じる場所を設けたのであり，それが小徐の見識といえるのではないだろうか。

［表 1］

No.	親字	行数	No.	親字	行数	No.	親字	行数	No.	親字	行数	No.	親字	行数
1-01	天	7	1-27	僞	4	2-19	妾	2	3-00	三		3-25	意	7
1-02	地	3	1-28	聲	4	2-20	子	4	3-01	亟	4	3-26	言	5
1-03	人	3	1-29	音	6	2-21	男	2	3-02	喜	2	3-27	語	3
1-04	文	3	1-30	章	1	2-22	女	3	3-03	樂	22	3-28	詞	8
1-05	王	7	1-31	響	3	2-23	兄	2	3-04	說	7	3-29	亂	2
1-06	皇	4				2-24	弟	2	3-05	舞	13	3-30	辭	14
1-07	帝	4	2-00	二		2-25	夫	6	3-06	怒	8	3-30a	𢘅	1
1-08	君	13	2-01	土	2	2-26	壻	3	3-07	哀	7	3-31	論	2
1-09	后	12	2-02	金	4	2-26a	婿	2	3-08	泣	4	3-32	思	2
1-10	官	4	2-03	水	4	2-27	嬰	3	3-09	悲	2	3-33	慮	2
1-11	日	3	2-04	木	5	2-28	兒	4	3-10	悉	6	3-34	憂	5
1-12	月	6	2-05	火	2	2-29	咳	4	3-11	慕	4	3-35	患	6
1-13	明	2	2-06	山	2	2-30	嫡	4	3-12	好	3	3-36	閟	2
1-14	清	2	2-07	谷	2	2-31	庶	4	3-13	惡	2	3-37	齋	3
1-15	光	2	2-08	性	3	2-32	孽	3	3-14	欲	4	3-38	戒	4
1-16	禮	5	2-09	命	16	2-33	孤	2	3-15	賢	5	3-39	諫	4
1-17	義	8	2-10	情	4	2-34	孝	4	3-16	愚	8	3-40	諂	2
1-18	仁	2	2-11	心	2	2-35	友	5	3-17	勑(勇)	5	3-41	𧩙	1
1-19	𢘓	2	2-12	臣	6	2-36	睦	8	3-18	狯	2	3-42	諛	3
1-20	信	2	2-13	民	4	2-37	姻	3	3-18a	怯	1	3-43	譖	3
1-21	道	23	2-14	刑	14	2-37a	媚	2	3-19	敬	2	3-44	佞	4
1-22	術	6	2-15	父	2	2-38	任	2	3-20	恭	8	3-45	恩	1
1-23	悳	6	2-16	母	3	2-39	恤	2	3-21	肅	6	3-46	讎	6
1-24	德	4	2-17	妻	2	2-40	聖	29	3-22	愼	2	3-47	善	4
1-25	行	4	2-17a	妾	3	2-41	忠	5	3-23	慈	3	3-48	善	2
1-26	眞	20	2-18	婦	2	2-42	和	42	3-24	志	2	3-49	否	2